

編集
林 鈴木
巨一
樹 彦

中 飯 飯
山 田 田
緑 知 晴
朗 之 巳

明 治 書 院

編 者

鈴木 一彦 (すずき かずひこ)

林 巨樹 (はやし おおき)

研究資料日本文法

第1巻 品詞論・体言編

創業88周年記念
特別定価 2,800円

昭和59年12月10日 初版発行

東京都千代田区神田錦町 1-16

発行者 株式会社 明治書院

代表者 三樹 彰

長野県長野市中御所2-30

印刷者 大日本法令印刷株式会社

代表者 田中 忠

発行所 株式会社 明治書院

〒101 東京都千代田区神田錦町 1-16

電話 東京 (292) 3741 (代)

振替口座 東京 3-4991

© K. Suzuki 1984 3381-26601-8305 製本 星共社

編集にあたって

言語に対する見方、言語観の相違が文法観の相違を生む。また、対象とする言語の違いによっておのずからそれに対する文法論上の処理も異なってくる。

江戸時代以前、日本の研究者は、日本語の本質を踏まえながら、それなりの文法体系を作り上げてきた。一方、十六世紀以来、西洋人の手によって、西洋文法の立場から日本語に対する文法的処理を行うといういくつかの成果が生まれ、それに従う日本人の学者の業績もあった。

右のような伝統的文法観、西洋文典の体系に基づいて整理された日本文典、両者の折衷によって作り上げられた文法理論など、さまざまなものの上に立って、明治以後、大槻文法・山田文法・松下文法・橋本文法・時枝文法などと称されるものをはじめとして、多くの文法学説が提示されて今日に至っている。

今回刊行される『研究資料 日本文法』全十巻は、以上のような過去の文法学説をふり返りながら、語論・構文論・敬語論・修辭論など広い分野にわたって、新しい視点から、それぞれの論を展開することを一つの目的としている。外国語・方言の分野からの論考を加えたのも、広い視野から日本語を見直そうという立場によるものである。また、「研究資料」という見地から、文法に関する過去の資料のうち基本的なものを選んで、それに対する解説を付し、可能な限りの注解を施して読者の便を計った。加えて、文法上問題となる諸事象について新しく調査収集、整理したものを収載した。これは、これからの国語教育に役立つことをも企図している。さらに、各

巻の巻末には、これからの文法研究に資するために、それぞれの分野における基本的参考文献を出来る限り一覧し得るよう収載することにつとめた。

全巻を貫いている一つの考えは、文法学説史の整理という点にある。学説史を巡ることによって、文法について今日どのようなことを問題にすべきか、どのような研究課題があるかを知ることが出来ると思うからである。

十年ほど前に刊行された『品詞別日本文法講座』は語論を中心とした論考が主なものであり、資料編も生のままを提示するにとどまっていた。これを拡大充実し、前述の趣旨によって企画したのが今回の十巻である。

読者が、文法知識を整理し、みずからの目で対象としての日本語を見つめて、文法はこうあるべきだと悟る、そのために本書の論考および資料は資するところ大であろう。また、そのような観点で活用されることを願ってやまない。

鈴木 一彦
林 巨樹

研究資料日本文法

全10巻

編集 鈴木一彦・林巨樹

創業八十八周年記念出版

特別定価 各二八〇〇円

過去の文法學說をふり返りつつ、
語論・構文論・敬語論・修辭論等、
各分野にわたって新しい視点から
問い直す新シリーズ。過去の重要
な基本資料も注解して紹介したほ
か、文法上の諸問題を提示説明。

好評配本中

全10巻の構成(毎月一冊配本)

▼内容見本呈

① 品詞論・
体言編 名 名 詞 発売ノ

② 用言編(一) 動 詞 発売ノ

③ 用言編(二) 形容 動 詞 発売ノ

④ 修飾句・
独立句編 副詞・連体詞 接續詞・感動詞 発売ノ

⑤ 助辞編(一) 助 詞 発売ノ

⑥ 助辞編(二) 助 動 詞 発売ノ

⑦ 助辞編(三) 助 動 詞 助動詞 辭典 配 第10回 本

⑧ 構 文 編 発売ノ

⑨ 敬 語 法 編 発売ノ

⑩ 修 辞 法 編 第9回 配 本

A5判 平均三三〇頁 箱入

明治書院

目 次

1 語の分類と品詞

鈴木一彦 1

はじめに 2

一 印欧語の文と日本語の文 3

二 漢文と和文 5

三 句の構成——《素材語》と《志向語》 9

四 語の分類の基準——《特殊句》の認定 10

五 助動詞の表現性 14

六 接続句 21

2 単位としての語——構文論から考える

福田真久 27

一 はじめに 28

二 言語単位・文法単位 28

三 研究史 29

松下大三郎 山田孝雄 橋本進吉 時枝誠記 服部四郎 渡
辺実 その他

四 結 び	54
-------	----

3 合 成 語——研究史の展望を中心に	漆 崎 正 人	59
---------------------	---------	----

一 はじめに	60
--------	----

二 中世までの合成語研究	62
--------------	----

平安時代——合成語的意識の成立 院政・鎌倉時代 室町時代

三 近世の合成語研究	70
------------	----

『日本釈名』 「熟字」の展開 『詞玉緒線分拾遺』

四 近代の合成語研究	71
------------	----

西周氏の研究 大槻文彦氏の研究 保科孝一氏の研究 岡沢鉦次

郎氏の研究 山田孝雄氏の研究 松下大三郎氏の研究 橋本進吉

氏の研究 時枝誠記氏の研究

五 おわりに	90
--------	----

4 語分類の歴史	西 田 直 敏	93
----------	---------	----

一 はじめに	94
--------	----

二 語分類前史	95
---------	----

語類意識の萌芽期 語類意識の形成期 語類意識の確立期

三 語分類本史 第一期——伝統的語分類期	102
----------------------	-----

富士谷成章の語分類	鈴木服の語分類	東条義門の語分類	富樫
広蔭の語分類	権田直助の語分類		

四 語分類本史 第二期「洋式実用文典語分類期」	109
-------------------------	-----

オランダ語文典『蘭学選』の語分類	鶴峯戊申の語分類	英文典の
語分類とその影響	田中義廉の語分類	中根淑の語分類
大槻文彦の語分類		大矢透

五 語分類本史 第三期「文法論的語分類期」	119
-----------------------	-----

山田孝雄の語分類	松下大三郎の語分類	安田喜代門の語分類
橋本進吉の語分類	杉山栄一の語分類	時枝誠記の語分類
静夫の語分類	語分類の課題と最近の動向	水谷

六 おわりに	139
--------	-----

5 品詞の転成	西尾寅弥	145
---------	------	-----

一 品詞の転成についての一つの考え方	146
--------------------	-----

二 動詞からのさまざまな方向への変質や転成	151
-----------------------	-----

三 品詞の転成はどのようにして生じるか	155
---------------------	-----

意味変化と品詞の転成	機能の転換と品詞の転成	付属語の自立語
化による品詞の転成	省略的表現と品詞の転成	

6 外国語の品詞分類	杉浦茂夫	163
------------	------	-----

一 はじめに	164
--------	-----

二 歴史的展望

ギリシア・ローマ時代 中世時代以降

166

三 現代の言語理論と品詞分類

175

四 おわりに

183

7 名詞・代名詞の諸問題

柏谷嘉弘 187

一 名詞と格機能

188

語順と格機能

名詞の意味と格機能

名詞の無格性

有格の名詞

名詞と零記号の辞

二 代名詞と指示

204

名詞と指示

関係概念を表現する名詞

人称代名詞

指示代名詞

反照代名詞

資料Ⅰ

近世以前の品詞分類研究書抄

〔中山緑朗〕

219

手爾葉大概抄(全)

ロドリゲス日本大文典(抄)

あゆひ抄(抄)

言語

四種論(全)

玉能緒縁分(抄)

詞玉橋(抄)

語学自在(抄)

古辞書の

語分類

資料Ⅱ

品詞論・体言関係研究文献一覧

〔中山緑朗〕

297

1

語の分類と品詞

鈴木
木
一
彦

はじめに

品詞という名称は、Parts of Speech (英語)、parts de discours (フランス語) など、西洋文典の訳語として成立したものである。江戸時代には、オランダ文法の訳語として、「詞品」「九品」「九品の詞」のようなものがある。ギリシア語・ラテン語を源とする西洋文典においては、語を八種に分けるいわゆる八品詞説が伝統的な型であった。十八世紀以降、英語の標準的な品詞は、冠詞・名詞・形容詞・代名詞・動詞・副詞・前置詞・接続詞・間投詞の九つとされている。この西洋文典の品詞分類が、江戸時代末期から明治時代にかけて日本の文法研究に大きな影響を与えた。一方、奈良時代から江戸時代末期に至るまで、日本人の日本語に対する語分類の意識およびその実践も伝統的に行われていた。つまり、日本語についての語分類の方法と実践は、

(1) 伝統的語分類：「万葉集」における〈辞〉の意識にはじまり、江戸時代末期に至るもの。

(2) 西洋文典に基づく語分類：十六世紀後半にポルトガル人が日本に渡来して以後の西洋人の手になる日本語研究、西洋文典に範を求めた日本人の日本語研究。

(3) 両者折衷の語分類：明治以後現在まで続く一般的語分類。

の三つの系統に分けられるのである。

そして、そこに生じている問題点は、「品詞分類」と「語分類」とが、日本語を対象とした場合、ほとんど一致しないという両者のギャップから生じてくるものと思われる。

品詞分類あるいは語分類の事実について、私は次のような考察を行ってきた。

。「明治初期の国文法」(『立教大学 日本文学 21』昭和43年10月)

。『品詞分類の歴史と学説』（『品詞別日本文法講座 1』昭和48年1月）

。『文節論の帰結』（『山梨大学教育学部研究報告 24』昭和49年2月）

。『詞』という単位——松下文法の課題』（『同 25』昭和50年2月）

などが主なものであり、これらは補訂の上、『日本文法本質論』（昭和51年2月）に収録してある。なお、同書の中でこの問題について、新たに次のような章を設けて私見を述べている。

「語の認定と句」

「日本語において「品詞分類」はどうあるべきか」

本稿では、これらの論を踏まえながら、別の観点から、日本語の特質に基づいた品詞分類および語分類のあり方を考えてみることをする。

一 印欧語の文と日本語の文

Parts of Speech

This is a book. (英)

Das ist ein Buch. (独)

C'est un livre. (仏)
(Ce est)

これは本だ。

このように対比させてみると、前三者の文の構造と日本語の構造が全く異なっていることは一目瞭然である。なお、日本語では、全く同じ内容の事柄を

これは本である。

これは本です。

これは本でございます。

と表現することが可能であるし、実際行われもする。しかし、前三者はこれらに対応する表現形式を持たない。

「文を構成する部分は」と問われた時、これを指摘することは、前三者、特に（英）（独）に於いては、きわめて容易である。しかし、このように短い表現であっても、日本文ではそう簡単には行かないようである。

英語の例でいえば、文を構成する部分は、*This is a book* の四つであり、それぞれは一語である。つまり、*Parts of Speech* の part は語なのである。

日本文では、文を構成する直接の部分は、一応「これは」と「本だ」の二つと考えられる。しかし、この両者は、それぞれ、一つの語とはいえない。別の例で考えてみよう。

I love him.

わたしが 彼を 愛する。

英文の三つの part に相当する部分は、分ち書きにしてある部分である。英語の「は」は素材表現であると同時に主語としての格表現を備えている。him は素材表現であると同時に目的格を備えている。これに對して、日本語の「わたし」「彼」は、それぞれ素材だけを表現していて、主格表現および目的格表現は、「が」「を」によって示されていると見なくてはならない。つまり、日本文では、次元の違う表現性を持つ語の結合体が文の直接の部分となつて、主語を表したり、目的語を表したりしているのである。この結合体を、今、〈句〉と名づけておく。そして、〈句〉の内部については、「私が」のように傍線を施して次元の違いを示すことにする。

次に、英文において、主語と目的語を素材の上で入れ替えるとしたらどのようなようにしなければならないだろうか。

。himを主語とするために文頭にもって行く。

。主格を備えた語にするために himを heに変える。

。文頭の語であるために Iを大文字に直して Heとする。

。Iを me に直して文末にもって行く。

。loveは Heが三人称単数の語であり、時制が現在であるから lovesとしなければならない。

このように最低五つの手続きを踏む必要がある。これに対して、日本文では、||線部の語を入れ替えて、

私を|| 彼が|| 愛する。

とするだけで、順序を代えなくても文は成立し、意味も通じる。

日本語では、句が Parts of Speech であり、その文中の位置は絶対的なものではないということははっきりしているようである。

そして、句は次元の異なった表現性を持つ語の結合したものであるということもはっきりしてきたのである。

このように見えてくると、品詞分類という時、日本語では「句の分類」に相当することになる。しかし、「句の分類」とどまっているわけには行かない。そこで日本語の特性に基づいた全く違った基準あるいは方法・手続きによって語分類を行う必要が生じてくるのである。

二 漢文と和文

諺曰桃李不言下自成蹊

これは「史記・李將軍伝讚」にある有名な文である。芥川龍之介は、これについて「侏儒の言葉」の中で次のよう

に記している。

桃李

「桃李言はざれども、下自ら蹊を成す」とは確かに知者の言である。尤も「桃李言はざれども」ではない。実は「桃李言はざれば」である。

この部分は、たしかに日本では「言はざれども」と読んでいたのが一般であるらしい。『大漢和辞典（諸橋徹次）』にも「タウリモノイハザレドモ」とあり、『日本国語大辞典』の「桃李」の子見出しも「とうり言わざれども下（した）おのずから蹊（けい・みち）をなす」となっている。

芥川は、このような上句の逆接表現を順接表現と解すべきだと主張しているのである。

因みに、岩波茂雄は「桃李云はざるも」と読んでいたようである。⁽¹⁾又、尾崎紅葉「心の闇」の中では、「桃李言（モノイハ）ざれど」となっている。

私は「桃李言はずして」と読むことを主張している。

右の五者の違いは、接続助詞「ども」「ば」「も」「ど」「して」の違いであり、この違いは、原漢文の表現形態には全く示されていない。（例えば、原文が「桃李雖不言」のように表現されていれば、逆接表現であることは明らかとなる⁽²⁾）

つまり、原漢文では、上句を順接表現と解することも可能であり、逆接表現と解することも可能であるような幅のある表現となっているが、これを和文にする場合には決定的な表現とならざるを得ないのである。

更に一例をあげれば、唐詩の中に

楓橋夜泊

張繼

月落烏啼霜滿天

江楓漁火對愁眠

姑蘇城外寒山寺 夜半鐘聲到客船

という有名な詩があり、

月落ち烏啼きて霜天に満つ。江楓、漁火愁眠に對す。

姑蘇城外寒山寺、夜半の鐘聲客船に到る。

と古來読み習わしている。後半二句は問題ないが、前半にはすっきりしない点がある。

。烏は夜中に啼くだらうか。

。漁火は闇の中ではつきりと浮び映えているだらうが、江楓（川のはとりのかえで）はそんなによく見えるだらうか。
。楓や漁火が愁眠（旅愁のためにうつらうつらしていること）に對する、というのはどういうことなのだらうか。

という点である。この点については、中国でも長い間問題になっていたらしく、最近、周建中という人が寒山寺を訪れて、近辺の地形や、過去の事実を確かめて別の解釈を得たということである（橋本万太郎「楓橋夜泊」『月刊言語』昭和57年8月）。その結論によってこの詩の前半の部分を読み下し文にすると、次のようになるであらう。

月は烏啼に落ちて霜天に満つ。

江・楓の漁火は愁眠に對す。

（月は西の烏啼橋のかなたに落ち、霜はあたり一面に降りた。江橋・楓橋の辺りに浮ぶ漁船のともしびは、南西に黒々と聳える愁眠山に對している。）

いずれの解釈が妥当であるかという点は、当面の問題ではない。前例と同じく、漢字十四字の原表現では、どちらの意に解することも可能であるが、読み下し文にした時は、それが決定的になるということが問題なのである。そしてそれは、この場合、「は」「に」「の」などの助詞によって決定されていることに注目したいのである。

漢文訓読・宣命書・和漢混淆文といった日本の文章表現の歴史は、漢文表現と和文表現との対立及び融和の事実を